

## 天の国の幸い

カトリック教会では11月は死者の月です。すでに亡くなったわたしたちの愛する人、親しい友人、家族を思い起こします。わたしたちも一度きりの人生という神さまからの贈り物をどのように生きるべきか考え、諸聖人の取り次ぎで祈ります。

今日のマタイ福音書では山上の説教の導入部分（マタ5・1-12a）が朗読されています。イエスさまが示す本当の「幸い」について考えることのできる美しい箇所です。全体の構造は、「キアスムス」（交差並行法）で構成されています。

- 1 貧しさ——迫害（3節と10節）
- 2 悲しみ——平和（4節と9節）
- 3 柔和——清さ（5節と8節）
- 4 義——憐れみ（6節と7節）

「貧しさ」（3節）は「迫害」（10節）と対応し、「悲しみ」（4節）は「平和」（9節）と対応します。「柔和」（5節）は「清さ」（8節）と対応し、「義」（4節）と「憐れみ」（5節）が中心に置かれています。全体を貫くギリシア語のマカリオイ「幸いである」という語は、ヘブライ語のアシュレイを翻訳したものですが「なんと幸いなことか！」という感嘆詞であるため、天の国に実現しているまことの喜びと幸いについて、単なる肯定を超えて、宣言していると考えられます。

まず、イエスさまが述べる「貧しさ」とは、日々の食べ物にも事欠く貧困を生きている人々を暗示しています。さらに物質的な貧困にとどまらず、神のまなざしから見て、自分が小さく弱い存在であることを理解している——謙遜な人——という意味合いも含まれます。もし、この小さな人々が、貧しさを通して「迫害」を受けるとすれば、「天の国はその人たちのものである」と約束し、天の国が貧しい人たちのものであることを示します。

「悲しみ」が「平和」と深いつながりを持っていることは、誰にでも想像できることかもしれません。平和を求めて生きる人々の心の中には、深い悲しみがあり、二度とそのような悲劇が繰り返されることのないようにといつも願っているに違いありません。その悲しみから生まれる平和への願いは、主ご自身の力によって、喜びと平和に変えられるのです。

「柔和」と「清さ」については、旧約聖書の詩編27が雄弁に神の美しさを目の当たりにすることこそ人間にとって最大の幸福であることを説明しています。「神はわたしの光、わたし

の救い、わたしは誰も恐れない。神はわたしのいのちのとりで、わたしはだれをはばかろう。  
...わたしは神に一つのことを願い求めている。生涯、神の家をすまいとし、あかつきとともに  
目ざめ、神の美しさを仰ぎ見ることを」。そして「義」と「憐れみ」は、すべての人の魂の救  
いを願うあわれみ深い神の姿を現すものです。

当該箇所直後は「あなたがたは地の塩、...世の光である」（マタ5・13、14）という説明  
に続きます。新型コロナウイルスは世界で猛威を振るっていますが、わたしたちは地の塩、世  
の光として歩むよう招かれています。コロナの初期症状の一つとして味覚や嗅覚を消失する  
という事例が報告されてきました。「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けら  
れよう」（マタ5・13）とイエスさまは説明しますが、今、わたしたちは、コロナ禍によっ  
て、人生の味わい、しあわせ、喜びを喪失してしまうかもしれない危機に見舞われています。  
しかし逆説的ではありますがイエスさまは山上の説教をとおして、わたしたちの貧しさ、悲し  
み、柔和な心、神を求める心こそ、いかなる状況にあっても生きることを肯定し、その喜びを  
味わうことができるようにするものであり、天の国の幸いをわたしたちに伝えるものである、  
と述べています。

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●諸聖人、聖書朗読箇所：

- ① ヨハネの黙示7・2-4、9-14  
—答唱詩編—詩編24より
- ② 使徒ヨハネの手紙3・1-3
- ③ マタイ5・1-12a